様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ１８１９１

研究課題名（和文）16世紀末から17世紀初頭のヴェネツィアにおける建築的介入と社会的変革

研究課題名（英文）Architectural intervention and social transformation in Venice from the end of the 16th century to the beginning of the 17th century

研究代表者
青木　香代子（AOKI, Kayoko）

日本女子大学・家政学部・研究員

研究者番号：００５９７０６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は16世紀末から17世紀初頭のヴェネツィアで、サン・マルコ広場やリアルト地区など、都市の象徴といえる空間でおこなわれた建築的介入に関して、その過程で交わされた議論が記された一次史料の調査・研究をもとにその実態を明らかにした。その結果、対抗宗教改革の影響を受けて、ヴェネツィアの内政面・外交面において進行しつつあった変革がそのような建築的介入のなかにも表出し、その結果、16世紀中頃までと比べると保守的で堅実とも言える計画が相次いで実現したことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の対象である16世紀末から17世紀初頭のヴェネツィアは、J.サンソヴィーノやA.パラーディオの死後にあたり、かつヴェネツィア・バロックの発展を率いていくことになるB.ロンゲーナが登場する前の時代にあたる。前後の時代のように、圧倒的な影響力を持つ建築家が不在だったこの時代は、これまで研究の蓄積が極めて少なかった。本研究では、この時代が社会的変革の時代であることに視座を置き、ヴェネツィアの都市・建築の実態を解明しようと試みた。これにより、巨匠が活躍した２つの時代を結ぶ極めて重要な時期の都市・建築の実態を解明した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the cities and architecture of Venice from the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, which has received little attention so far. In particular, I focused on public construction projects, and researched on discussions in the process. As a result, it became clear that the confrontation between the nobility known as the “giovani” and the “vecchi”, which had been realizing in Venice at that time, appeared in San Marco Square, the the Rialto area, and the like.

研究分野：イタリア建築史・都市史

キーワード：建築史　都市史　ヴェネツィア　ルネサンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世ヴェネツィアの建築的介入に関する研究は、1960 年代末以降徐々に展開し、1980 年代になると急速に進展する。なかでも 1980 年代の M.タフーリによる一連の研究は、16 世紀前半のヴェネツィアの都市・建築における発展を、社会的背景との関連で捉えようとする新たな視点を導入した。M.タフーリは、当時のヴェネツィアが中世から文学や美術という幅広い分野で表現され続けてきた「ヴェネツィア神話」が最も鮮明に描かれた時代であることにも着目し、ドージェ（総督）A.グリッティが建築家 J.サンソヴィーノを主任建築官に登用し、ヴェネツィアを第二のローマとする“都市改新 *Renovatio Urbis*”を構想したのもその一端であると論じた。この成果は、後の研究に大きな影響を与えたが、その多くが J.サンソヴィーノが主任建築官を務めた 1520 年代末から 1560 年代までと、多大な影響力を持った建築家 A.パラーディオが活躍した 1560 年代から 1580 年頃までの二時期を対象としたもので、それ以降については M.タフーリによる”*Venezia e il Rinascimento,* Torino, 1985”にわずかな言及があるに過ぎない。つまり、E.ピッコローミニが 1590 年代に“*Oratio in Funere Paschalis Ciconiae*, Venezia, 1595”と ”*De Laudibus Paschalis Ciconiae*, Venezia, 1597”で、2 人のドージェ、N.ダ・ポンテ（1578-1585 在位）と P.チコーニャ（1585-95 在位）の治世におこなわれた建築的介入を“2 度目の都市改新 *Seconda Renovatio Urbis*”と称し、実際多くの建築的介入があったにも関わらず、この 16 世紀末から 17 世紀初頭を対象とした研究はこれまでほとんどおこなわれてこなかった。わずかに建築単体や建築家個人に関するモノグラフはあるが、都市への建築的介入という枠組みで捉え直し、当時の社会状況から論じられているものはなかった。

２．研究の目的

本研究は、対象時期をレパントの海戦でトルコに勝利した 1571 年頃から、ローマ教皇がヴェネツィアに対する聖務禁止令を撤回したことで、1580 年頃から激しく対立してきた双方が和解する 1607 年頃までとし、この時代におこなわれた建築的介入の実態と社会背景との関連を明らかにすることを目的とする。

従来の研究で繰り返し指摘されているように、16 世紀前半の A.グリッティによる都市改新は、ヴェネツィアが内外で大きな変化に直面し、その危機的状況から脱するための政策の一環として「ヴェネツィア神話」と結びついて行われた。一方、本研究の対象となる 16 世紀末から 17 世紀初頭も、レパントの海戦でのトルコへの勝利をきっかけに「ヴェネツィア神話」に再び光が当たった時代である。また、人口の 3 分の 1 が犠牲となったペストの流行直後であり、1582-83 年におこなわれた十人委員会の改革にも表出したように、対抗宗教改革の影響を受けて教皇庁との対立が決定的になるなど、相次ぐ危機に瀕した時代でもあった。当時のこうした社会的特質が都市や建築にも深い影響を及ぼしたという事実は、申請者がこれまでおこなってきた 16 世紀後半から 17 世紀のヴェネツィアの劇場に関する研究（2011-2014 年度 若手研究（B）「17 世紀ヴェネツィアにおける公衆オペラ劇場誕生の経緯とその実態」および東京藝術大学課程博士（美術）学位取得論文『16 世紀後半ヴェネツィアのサン・カッシアーノ地区における劇場の建設と上演』2010 年）の成果からも明らかである。以上のことから、16 世紀末から 17 世紀初頭にみられる建築的介入の実態とそこに表出する社会的変革の実相を解明しようとする本研究は、既に研究が進展している 16 世紀半ばまでとの比較を可能にする上で重要な意義をもつ。

３．研究の方法

本研究では、現地調査と資料、史料の収集・分析をおこない、まず対象となる時代のヴェネツィアにおける建築的介入に関わる社会背景を明らかにした。次に視点を建築的介入にそのものに移し、親教皇派・反教皇派貴族それぞれが支持した建築家による計画の実態を、図面やスケッチなどの図像史料だけでなく、その建設過程に交わされた議論の内容等から実証的に解明することを試みた。研究の主な対象としては、サン・マルコ広場に面するプロクラティーエ・ヌォーヴェ、図書館、新牢獄が挙げられる。

４．研究成果

16 世紀後半、サン・マルコ広場でおこなわれた建築的介入は、ヴィチェンツァ出身の建築家、ヴィンチェンツォ・スカモッツィによる図書館の増築とプロクラティーエ・ヌオーヴェの建設を中心としたものであった。スカモッツィにこの計画がまかされたのは 1582 年で、親教皇派のマルカントニオ・バルバロの支持を受けてのことだった。マルカントニオはダニエーレ・バルバロの弟にあたり、兄とともにアンドレア・パッラーディオの最大のパトロンであったと言われている。またヴェネツィアにおける建築関係の要職を歴任し、1581 年、プロクラティーエ・ヌオーヴェの建設を担当する監査官にも選出された。彼はスカモッツィが古典や数学に関する深い教養を身につけていたことに注目し、スカモッツィこそがパッラーディオの後継者となりえ、サン・マルコ広場を完成させるにふさわしい建築家であると考えた。一方、マルカントニオ・バルバロとともに、プロクラティーエ・ヌオーヴェ建設の監査官を務めた貴族の中には、反教皇派のアンドレア・ドルフィンやアンドレア・モロシーニなどがいた。彼らはマルカントニオ・バルバロとは対照的に、スカモッツィをローマ・カトリック主義者であるとし、彼の計画を、ヴェネツィアの伝統を破壊するものとみなした。図書館の増築とプロクラティーエ・ヌオーヴェの建設に

関する一次史料(Procuratia de supra および Senato terra)の調査から、建築に対する豊富な知識と経験をもちあわせていたバルバロが監査官の職を離れていた 1592 年 4 月 17 日から 1594 年 11 月 11 日までの間と、辞任した 1595 年 12 月 13 日以降に集中してスカモッツィの計画を阻止しようという動きがあったことがわかる。その結果、図書館の増築に関するスカモッツィの提案は棄却され、基本的には 1530 年代に計画されたサンソヴィーノの案に従うことが命じられている。こうした経緯もあり、スカモッツィはこの後に手掛けたプロクラティーエ・ヌオーヴェの建設において、自らサンソヴィーノの案を下敷きにした計画を提出した。しかし、それにもかかわらず 1587 年には反教皇派貴族たちの圧力によって罷免されるなど、再び困難に直面することになった。1594 年にはマルカントニオ・バルバロが監査官を辞職し、翌年死去すると、プロクラティーエ・ヌオーヴェの建設に関する議論が激化する。親教皇派的立場から常にマルカントニオ・バルバロとともにスカモッツィを支持していた監査官ヤコポ・フォスカリーニはスカモッツィの案をもとにプロクラティーエ・ヌオーヴェの建設工事を継続することを求めた。しかし、その一方でレオナルド・ドナをはじめとする反教皇派の貴族たちは、スカモッツィの遺した案をオーバー・スケールで都市の美観を損ねると猛烈に批判した。そして広場を介して向かい合うプロクラティーエ・ヴェッキエ（マウロ・コドゥッシ，1532 年）をサン・マルコ広場にとって相応しいデザインであるとして賞賛し、すでにスカモッツィの案に基づき建設が進められていた部分を取り壊し、プロクラティーエ・ヴェッキエに似た意匠で再建することを求めた。このように双方の対立が如実化していた中、当時のドージェ、マリーノ・グリマーニはもうひとつの案を提案した。それは、議論が長期化し、広場の南側部分がいまだ未完成であることを問題視したもので、基本的にはすでに建設が進行していたスカモッツィの案に従うが、3 層ではなく、2 層に変更して早急に完成させるというものであった。そして、この 3 つの案に対して 1596 年 9 月 28 日と 11 月 25 日の 2 度にわたりセナートで投票が行われ、スカモッツィの案で建設を継続すること、ただし、スカモッツィ本人は解雇することが決定された。スカモッツィは図書館の増築計画では、3 層目を追加するという当初の考えを断念し、サンソヴィーノのデザインを踏襲したデザインで進めた。また、プロクラティーエ・ヌオーヴェの計画においてもサンソヴィーノの図書館計画にみられるモチーフを引用し、図書館からポルティコを連続させることで空間的なつながりを持たせた。当時の教会を「世俗的欲望の塊」とまでに猛烈に批判する反教皇派貴族が台頭しつつあった 16 世紀後半にサン・マルコ広場でみられた建築的介入は、計画から半世紀近くが経ちすでに時代遅れになっていたかもしれないサンソヴィーノのデザインを継承して完成したといえる。これは、サンソヴィーノという外国人建築家を登用し、“古代風 all'antica”という新しい様式を導入することで、ピアツェッタのイメージを一新させようとした 16 世紀前半の大胆な介入とは比べると控えめな解決策であった。しかし、このプロクラティーエ・ヌオーヴェの完成は、単体の建築としてだけでなく、11 世紀に完成したサン・マルコ大聖堂、12 世紀に建設し 1557 年にサンソヴィーノがファサードを完成させたサン・ジェミニャーノ聖堂、パラッツォ・ドゥカーレのゴシック風のファサード、ヴェネツィアにおけるルネサンスを代表する建築家コドゥッシによる時計塔(1506)とプロクラティーエ・ヴェッキエ (1532)、そして 16 世紀前半にサンソヴィーノが計画した図書館(1537-1588)、ロジェッタ(1546)、造幣局(1545)という、様々な建築を連続させることで、サン・マルコ広場という都市空間を統一し、完成することになった。また、結果としてそれまでサン・マルコ聖堂とサン・ジェミニャーノ聖堂が対面し、宗教的な祝祭の場として使用されてきたサン・マルコ広場、海に面し、サンソヴィーノによって華やかな儀式・祝祭の場として生まれ変わった小広場、この 2 つの広場をゆるやかに繋ぎ、さらには広場に対するサン・マルコ聖堂の象徴性を高めることになった。

このように、サン・マルコ広場に面する建築の計画はスカモッツィに依頼された一方で、それに先駆けた 1563 年から 1614 年にかけて計画が進行した新牢獄は、アントニオ・ダ・ポンテに託された。ダ・ポンテは当時ヴェネツィアにおける建築関係の最高位の職であるプロート・アル・サーレに就き、ヴェネツィアの伝統を引き継ぐ保守的で堅実な建築家として信頼を得ていたことが知られている。新牢獄建設の経緯に関する調査（Senato Terra および Consiglio dei dieci 他）の結果からは、ダ・ポンテは 1563 年に計画の依頼を受けると、即座に資材の調達、既存建物の解体、基礎工事に着手したことが明らかとなった。しかし、そうした中 1589 年にヴィンツェンツォ・スカモッツィは自らの支持者であるジャコモ・コンタリーニが十人員会長を務めていたことを利用し、彼を介して新牢獄の計画を提出することで、議論を巻き起こした。しかしながらその案は、反教皇派貴族によって固く拒否され、結果として新牢獄はダ・ポンテの案で完成することになった。

同時期のヴェネツィアでは、その他にリアルト橋の計画(1587-91)、イル・レデントーレ聖堂(1577)の位置に関する議論、パラッツォ・ドゥカーレの火災(1577)後の再建に関する議論等がみられるが、そこに共通して表出したのは反教皇派と親教皇派貴族による対立であった。マルカントニオ・バルバロ、ヤコポ・フォスカリーニ、ジャコモ・コンタリーニなど親教皇派貴族たちはパラディオの後継者としてみなされていたスカモッツィによる古典主義的なデザインを好み、一方でアンドレア・ドルフィンやレオナルド・ドナに代表される反教皇派の貴族たちは、より保

守的で堅実なデザインを求めた。1582-83 年の十人委員会改革にみられるように、それまで親教皇派による寡頭化が進行しつつあった政府内では、16 世紀末になると反教皇派貴族が存在感を強めるようになる。こうした背景を元に行われた建築的介入は、象徴性が強く求められた 16 世紀前半の建築的の介入に比べると、保守的な解決策であるように見える。しかしながら、それは再び不穏な時代を迎えた 16 世紀後半のヴェネツィアが、そこからの脱却を望み、16 世紀前半に隆盛したヴェネツィア神話に倣った結果でもあった。

＜引用文献＞

① Breiner, D. M., *Vincenzo Scamozzi, 1548-1616: a catalogue raisonné*, Thesis(Ph.D.) Cornell University, 1994.
② Tafuri, M., *Venezia e il Rinascimento*, Torino, 1985.
③ Howard, D., *Venice disputed: Marc'Antonio Barbaro and Venetian Architecture, 1550-1600*, New Haven and London, 2011.
④ Calabi, D. e Morachiello, P., *Rialto: le fabbriche e il Ponte,* Torino, 1987

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 青木香代子	４．巻 14
２．論文標題 近世ヴェネツィア にみる社会的危機とサン・マルコ広場における建築的介入	５．発行年 2015年
３．雑誌名 危機に際しての都市の衰退と再生に関する国際比較[若手奨励]特別研究委員会報告書	６．最初と最後の頁 105-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 初田香成,岩本　馨,栢木まどか,福嶋啓人,岩城考信,川本智史,鈴木真歩,登谷伸宏,岸泰子,髙橋元貴,三宅拓也,青木香代子,満田さおり,赤松加寿江,東辻賢治郎,會田涼子	４．発行年 2019年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 406
３．書名 危機の都市史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考